

平成 29 年 3 月 22 日

平成 28 年度国立大学図書館協会海外派遣事業参加報告書

一橋大学学術情報課
寺島 久美子

1. 訪問期間

平成 28 年 11 月 13 日 (日) ~11 月 19 日 (土)

2. 訪問先および担当者

	訪問先	担当者
①	南洋理工大学図書館 (Nanyang Technological University Library)	Ms. Dianne Cmor (Deputy University Librarian) Ms. Goh Su Nee (Senior Assistant Director, Scholarly Communication Division) Ms. Men Yali (Senior librarian, Scholarly Communication Division)
②	シンガポール国立大学図書館 (National University of Singapore Library)	Dr. Sim Chuin Peng (Senior Associate University Librarian) Ms. Tan Geok Kee (Head, Research Support and Scholarly Communication) Ms. Kow Yu, Geraldine (New Head, Scholarly Communication) Mr. Jonathan Pradubsook (Lead, Bibliometric Team) Ms. Chew Shu Wen (Lead, Publishing Resource Team) Mr. Feng Yikang (Lead, Digital Scholarship Team)
③	シンガポール経営大学図書館 (Singapore Management University Library)	Ms. Gulcin Cribb (University Librarian) Ms. Yeo Pin Pin (Head, Scholarly Communication) Ms. Yuyun Wirawati Ishak (Head, Information Services)
④	シンガポール国立図書館庁 (National Library Board: NLB)	Mr. Mohamed Saleem (Assistant manager, International Relations & Development) Ms. Lee Meiyu (Librarian, Content & Service) Ms. Gladys Low (Manager, Content & Service)
⑤	library@orchard (公共図書館)	(見学)
⑥	library@esplanade (公共図書館)	(見学)
⑦	Central Pubic Library(公共図書館)	(見学)

3. 調査目的

シンガポールの大学は、国際的な研究評価を上げるために先進的な取り組みを行い、そこに大学図書館が積極的に関わっている。国立図書館や公共図書館も学術情報の保存や提供に役割を担っている。本計画では、シンガポールの代表的な大学図書館及び国立図書館、公共図書館を訪問し、図書館がいかに研究支援に貢献できるかを調査する。

4. 調査成果

シンガポールでは大学図書館、国立図書館、公共図書館がいずれも、自館に何が求められているかを検討し実行しているという印象を受けた。各館の取り組みを以下に報告する。

① 南洋理工大学図書館 (Nanyang Technological University Library)

南洋理工大学 (NTU) は、2011 年にオープンアクセスを義務化し、機関リポジトリ (DR-NTU) への研究成果の登録を必須とした。その結果、リポジトリへの登録について研究者に説明する機会が増え、リポジトリへのフルテキスト登録件数が増加した。

また、NTU は 2015 年に **Research Data Policy** を発表し、研究データの取扱い方針を策定した。**Research Data Policy** には研究者、部局、**Research Support Office**、図書館の研究データ管理における役割が具体的に定められている。図書館の役割は研究データ管理のサポートであり、具体的には研究データに対応した機関リポジトリの構築 (2017 年実装予定)、研究者へのワークショップの開催、ウェブサイト上での **Data Management Plan** の **Template** (ひな形) の提供などを行っている。

② シンガポール国立大学図書館 (National University of Singapore Library)

シンガポール国立大学図書館 (NUS Library) は研究サイクル全体を支援することを目指し、2014 年に **Scholarly Communication Committee** という組織を立ち上げた。2016 年に **Research Support and Scholarly Communication Unit** と名前を改め、**Publishing Resource Team**、**Bibliometric Team**、**Digital Scholarship Team** の 3 つのチームから構成されている。

Publishing Resource Team は、学術出版支援と機関リポジトリ (**Scholarbank@NUS**) の広報を担当している。出版社と共同のワークショップの開催、オープンアクセスの推進イベントの開催、機関リポジトリの **FAQ** の作成などを行っている。

Bibliometric Team は、研究成果の引用分析や、研究業績リストの作成支援、研究インパクト測定のためのワークショップ開催などを行っている。研究者や職員の依頼に応じて、研究機関のベンチマークや論文投稿先のアドバイスなども行っている。

Digital Scholarship Team は、デジタルデータを長期的に保存・管理・活用することを通じて、データを使った研究を支援している。実験的な試みとして、シンガポールにおける中国人コミュニティの位置情報を **Google Map** 上に時系列で表示する「**Maps of Origin**」をウェブサイト上で公開している。

③ シンガポール経営大学図書館 (Singapore Management University Library)

シンガポール経営大学 (SMU) は 2014 年に、統合された研究情報管理システム (Integrated Research Information System : IRIS) として、トムソン・ロイター社の Converis という研究マネジメントツールを導入した。SMU では、研究に関する情報 (研究者情報、研究業績リスト、機関リポジトリ、助成金情報など) が別々に管理されていた。Converis の導入によって、学内共通の様式で研究情報を一括管理できるようになり、データの抽出や分析が容易になった。外部データベースからの出版物情報のエクスポートや、研究者 ID (ORCID 等) の連携も可能となり、研究情報がより豊富で正確になった。研究者にとっても、登録の流れが分かりやすくなり、論文のダウンロード数などを確認できるようになったことで、登録の動機づけが向上している。

④ シンガポール国立図書館庁 (National Library Board: NLB)

シンガポール国立図書館 (NLB) は、多様な資料を収集・提供することを通じて研究に貢献している。特にシンガポールの歴史と文化に関する資料や、通常の流通ルートに乗らない資料 (イベントのポスターやパンフレットなど) の収集に力を入れている。近年では資料のデジタル化に注力しており、シンガポールの新聞をデータベース化した「Newspaper SG」、シンガポールの街並みなどの写真を検索できる「Picture SG」、楽譜など音楽関係の情報を提供する「Music SG」をウェブサイト上で公開している。実際の来館者数は減少傾向にあるが、こうしたオンラインサービスの利用は増加しており、新たなニーズに対応していることが窺えた。

⑤ ~ ⑦ library@orchard、library@esplanade、Central Pubic Library (公共図書館)

library@orchard は、繁華街にあるショッピングモールの中に 2014 年にリニューアルオープンした。デザインやアート関係の資料を揃え、居心地の良い空間を提供している。library@esplanade は、パフォーミングアーツ (演劇、映画、音楽、ダンスなど) に特化した公共図書館として 2002 年に開館した。劇場やコンサートホールを備えたアート複合施設内にあるという立地を生かし、ダンスのワークショップやプレコンサートトークなどのイベントを館内で頻繁に行っている。Central Pubic Library は、2005 年に国立図書館庁 (NLB) の地下 1 階に開館した。大人向けに新聞、雑誌や小説を提供する一方、子ども向けにシンガポールの公用語である 4 言語 (中国語、マレー語、タミール語、英語) でのお話会を開催するなど、読書推進や集会行事に力を入れていた。

大学図書館は研究サイクル全体を積極的に支援し、国立図書館はシンガポール固有の資料の収集に、公共図書館は知的好奇心を刺激する空間やサービスの提供に力を入れていた。シンガポールの図書館の企画力と行動力は、日本の図書館が研究支援の取り組みを考える上で大いに参考になると考える。